

蓬 左

HÔSA



茶屋新六交趾渡航図巻(部分)
情妙寺蔵

展示室1・2 徳川美術館

秋季特別展

宮廷の雅 ―有栖川宮家から高松宮家へ―

江戸時代初期に創設された皇族・有栖川宮家は、和歌と書道を家の学問（家学）として伝え、宮廷文化を支える役割を果たしました。後陽成天皇の第七皇子・好仁親王を初代として大正時代まで続き、その後は大正天皇の第三皇子である宣仁親王が有栖川宮を継いで、高松宮家が創立されました。

今回の展覧会では、有栖川宮家・高松宮家に伝えられた絵画・書跡・刀剣や調度類、歴代親王が着用した装束などの御遺愛品、後水尾天皇が譲位後に営まれた修学院離宮ゆかりの作品を徳川美術館第七・九展示室で、また近代以降の高松宮宣仁親王・喜久子妃の御身回りの品を蓬左文庫展示室で展示し、江戸時代から続いた皇族の文化活動を紹介します。当初は会期四月九日から五月二十二日までの展示を予定しておりましたが、東日本大震災の影響により、この秋に開催する運びとなりました。なお会期中、展示作品の入れ替えがありますのでご了承ください。



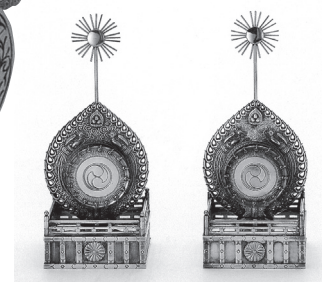
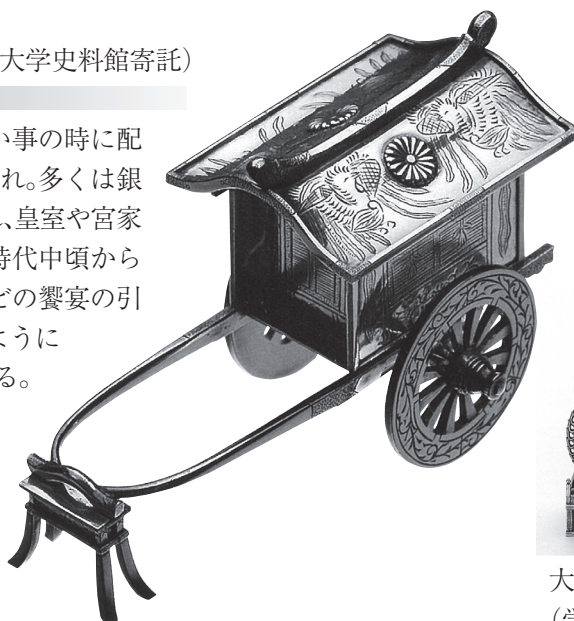
ディナーセット 一揃（公益財団法人日本美術協会・上野の森美術館蔵）

有栖川宮家九代の威仁親王（1862～1913）は明治22年（1889）から1年間、妃殿下を伴ってヨーロッパ各国を軍事視察として歴訪し、この時に正餐用（ディナー用）食器を買求めて帰国した。食器はリモージュ製、銀器はクリストフル社製、グラス類はバカラ製と伝えられ、それぞれに有栖川宮家の家紋「三つ横見菊紋」が入っている。これらは有栖川宮家から高松宮家へ受け継がれ、その後長く高松宮家の公式午餐会に使われた。

牛車形ボンボンニエール（学習院大学史料館寄託）

ボンボンニエールは、皇室のお祝い事の時に配られる主に銀製の小さな菓子入れ。多くは銀製で、華やかな意匠工芸が施され、皇室や宮家の紋があしらわれている。明治時代中頃から皇室の御慶事や成年式、婚儀などの饗宴の引き出物として参加者に贈られるようになり、現在もその慣習は続いている。

牛車形のボンボンニエールは、昭和9年（1934）ベルギー特派大使のタイス氏を招いて開催された宮中午餐会のおりに配られた品である。

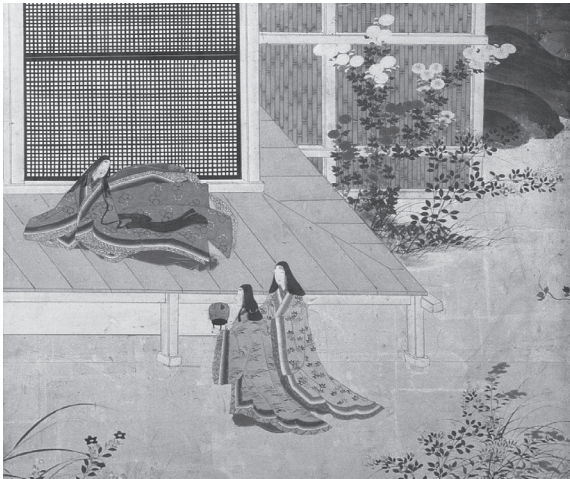


大太鼓形ボンボンニエール（学習院大学史料館寄託）

源氏物語の世界

紫式部によって著された『源氏物語』は、今からおよそ千年前の平安時代に成立しました。『源氏物語』は、その成立以降現在にいたるまで、わが国を代表する古典として読み継がれ、書き継がれてきました。蓬左文庫には、重要文化財「河内本 源氏物語」を筆頭に、さまざまな写本や注釈書などが所蔵されています。

また、『源氏物語』を絵画化した「源氏絵」は、物語成立後ほどなくして製作されるようになったと考えられており、平安時代以降、各時代を通じて享受されました。絵巻や屏風・色紙など、さまざまな画面形式に描かれた源氏絵が今に伝えられています。徳川美術館本館における「国宝 源氏物語絵巻に挑む―東京藝術大学現状模写」展に合わせ、蓬左文庫と徳川美術館が所蔵する書籍や源氏絵など、『源氏物語』にちなんだ作品を特集展示します。



源氏物語図屏風（部分）
江戸時代 17世紀（徳川美術館蔵）

『源氏物語』を絵画化した屏風の中には、物語の順序にとらわれず、各場面を四季の順に配列した作例がある。本作品は、右隻に春・夏の場面を、左隻には秋・冬の場面を配し、六曲一双で四季が表されている。掲出の部分は、第二十八帖「野分」の、秋好中宮の庭で女童達が虫籠に露を含ませる場面。

特別公開 徳川美術館 本館展示室

国宝「源氏物語絵巻」

柏木(三)・宿木(一) 展示期間 11/12～11/27

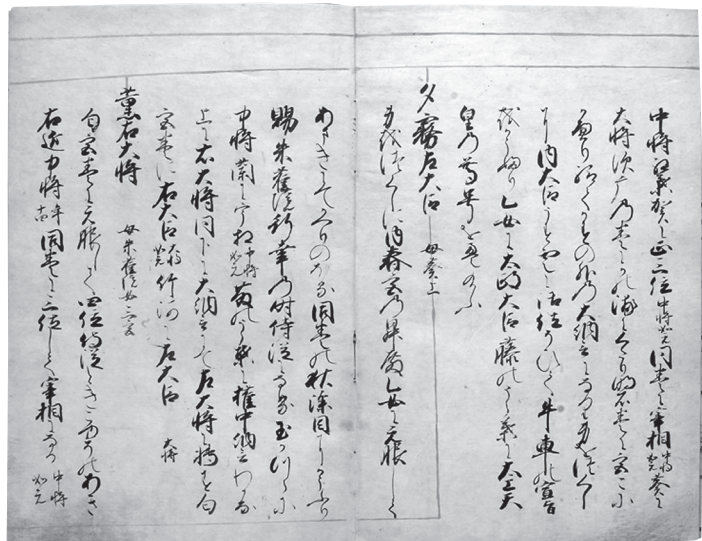
横笛・東屋(二) 展示期間 11/29～12/11

光源氏系図 三条西実隆編 室町時代 16世紀 1冊

源氏物語の登場人物を皇族・大臣などに分け、略歴を付して系図形式で整理したもの。二世代70年余にわたり500人余りの人物が登場する『源氏物語』を人物の関係を理解して読むためには必要な参考書であり、すでに11世紀には、「系図」にあたるものが存在していたという。

本書は、三条西実隆(1455～1537)が編さんした実隆本系の写本。実隆本以前の「古系図」には、現在伝わらない人物の名称などが記されていたが、実隆によって「河内本」「青表紙本」成立以降の内容に即して統一、補正された。

実隆本には、作成された年代によって数種類の写本が伝来するが、本書は最初に編さんされた長享2年(1488)成立の「長享本」の系統に属する写本である。





萌葱綸子地葵紋付蔓葵文散小袖
徳川光友所用 一領（徳川美術館蔵）

尾張徳川家二代光友の着料として伝えられた一領。蔓葵紋を散らした華やかな小袖で、袴とともに用いた公務服ではなく、日常生活のなかで用いたおしゃれ着の一つであったと想像される。

春日社所蔵 頼朝鎧之雛形

太平の世が続いた江戸時代中期になると、過去の合戦や武具を学問的に調査研究することがさかんになってきた。なかでも老中松平定信(1758～1829)は、日本各地の神社などに残る武器・武具の調査を命じ、模写図や拓本を収集し、その成果は、ほかに古書画や古器物を含めて『集古十種』に収めた。尾張でも九代藩主徳川宗睦(1733～99)が藩内の寺社などの宝物調査を藩士に命じ、定信と同じように全国各地の鎧などの模本を収集した。蓬左文庫が所蔵する鎧図に描かれている鎧を着用していた武将名と、現在の所蔵者、鎧の名称、指定などを以下にあげる。

- 源義家 大阪・坪井八幡宮 黒韋威胴丸 重要文化財
- 源頼朝 奈良・春日大社 赤糸威大鎧 国宝
- 源義経 奈良・興福寺 焼失
- 平重盛 広島・厳島神社 紺糸威鎧 国宝
- 佐々木盛綱 岡山・豊原北島神社 色々威大鎧 重要文化財
- 畠山重忠 東京・武蔵御嶽神社 赤糸威大鎧 国宝
- 大内義隆 広島・厳島神社 藍韋威胴丸 重要文化財

このように、ほとんど源平合戦で活躍した武将で、彼らに武士の原形を見いだしたのかもしれない。模写は、大鎧を構成する胴・袖・草摺・兜など、それぞれ部品ごとに一枚ずつ描かれ、すべて原寸大で残っているが、現物を直接写したのではなく、すでに模写された図を写したものが多くあり、鎧の部品を模写することは、細部の製法を理解するのに役立った。図版で紹介したのは、源頼朝が着用し奈良の春日社に奉納したといわれる赤糸威大鎧の写図である。調査の結果、鎧の制作年代は鎌倉時代末で、頼朝の時代とは一致しない。



琉球漆器の美



重要文化財 花鳥七宝繁文密陀絵漆絵沈金御供飯 一具
琉球 16-17 世紀 (徳川美術館蔵)

御供飯とは、琉球独特の神饌具。高い足と蓋の備わる食籠の一種で、内部には大小の碗が収まる。朱漆地に花鳥が色鮮やかに描かれ、地文様は金色に輝いている。慶長14年(1609) 島津氏が琉球王府を侵攻したときの戦利品と推定され、徳川家康に献上されてから、尾張徳川家に伝わり、藩校・明倫堂の儒教祭器となった。

雲龍文螺鈿琵琶 一棹 琉球 16-17 世紀 (徳川美術館蔵)

琉球列島には世界最大の大きさに成長する巻貝のヤコウガイが生息する。深い虹色の光沢が豊かで、東アジアの最高の螺鈿材料として使用されてきた。正倉院の宝物にもあり、中国にも輸出された。江戸時代の琉球は、中国皇帝からも認証をうけるなど薩摩との二重支配であったが、中国螺鈿の意匠・技術を取込んで、日本や海外向けに優れた作を送り出した。

茶屋新六交趾渡航図巻(部分) 江戸時代 17 世紀
愛知県指定文化財 (名古屋市東区・情妙寺蔵)

「茶屋新六交趾渡航図巻」(解説8頁上段参照)の内、交趾(ホイアン)の港に朱印船が到着する様子を描いた部分。ひととき大きく描かれた朱印船を曳き舟が港へ引き寄せる場面、これを迎える唐人町や漁師町、日本人町の様子、その向こうには瓢箪の棚があってキリシタン風の人物も描かれている。



アジアの風

会期：平成24年1月4日(水)～2月12日(日)

展示室1

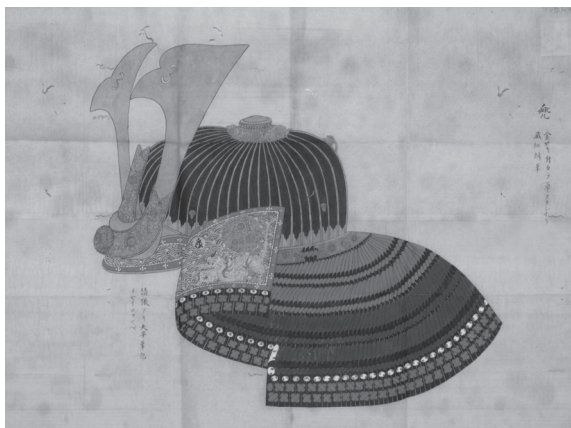
大名の服飾

大名は官位や家格、季節や場所、立場などに応じ、多種多様な服飾が用いられました。尾張徳川家の当主たちも、江戸城や名古屋城で行われる儀式の際には、束帯や直垂といった儀礼用の服を身に着けていました。また狩猟や野外に出かける時には、それぞれ目的に応じた服装にあらためました。大名が公私の生活の中で用いた、さまざまな種類の衣服を紹介します。

展示室2

よろいを写す―源平武将の装い―

泰平の世になって一世紀。実質的には軍人でなくなつてしまい、役人としての一生を過ごせばよかった武士たち。そこへ「そもそも武士とはなんぞや」と考えた八代將軍吉宗と、その孫松平定信が登場しました。定信や九代尾張藩主宗睦は、全国の神社などに奉納された武將の鎧の調査を命じ、写図を作成させました。甲冑の奉納主は、源頼朝・平重盛・畠山重忠など、源平合戦期の武將がほとんどです。定信や宗睦にとって彼らは理想の武士像だったのでしょ。



「秩父重忠鎧之図」のうち兜図

会期：平成24年2月15日(水)～4月8日(日)

展示室1

琉球漆器の美

琉球王国は、東シナ海の小島ながら十五世紀に中山王^{ちゅうざんおう}によって統一されると海上交易を基盤にして文化・芸術が大きく発展しました。焼き物・染め物・織物・塗物など現在にも伝統が継承されています。中国・ベトナム・日本など多國間の交流を背景にして芸能や風俗はじめ美術工芸の意匠や技法などは國際的に融合し、独自に発展した点に特色があります。十七世紀はじめ薩摩の島津氏支配下になってからも、琉球王国は明治十二年(一八七九)まで存続しました。第二次世界大戦後は、アメリカ統治下に置かれました。平成二十四年(二〇一二)は昭和四十七年(一九七二)五月十五日に沖縄県が日本に返還されてから四十年目にあたります。徳川美術館には、家康が所有した品のほか琉球漆器の代表作が多数所蔵されており、関連作を含めて特集展示します。

展示室2

アジアの風

徳川家康や初代尾張藩主義直、二代光友の収集した蔵書を中心とした蓬左文庫を代表する漢籍コレクションを概観すると、中国文化圏の一員としての意識を強く感じます。

東西の文化が交流した信長・秀吉・家康三英傑の時代は鎖国によって幕を閉じましたが、オランダや中国を窓口とした海外貿易、朝鮮からの通信使、琉球からの使節等々、尾張徳川家の大名道具や蔵書からは、江戸という時代がアジアの風を色濃く受けていたことを感じるができます。

展示室2では、蓬左文庫所蔵の書籍や古絵図を中心に中国と周辺諸国の歴史・文化、日本との関係を示す資料を紹介します。

宝永地震

—『鸚鵡籠中記』にみる地震—

「十月四日東北^{よりなほ}鳴轟^{なりとどろ}て地震す。未の一点也。漸々強くして不鎮故、座中申合せ皆庭へ飛下る。大方^{はた}跳なり。地震倍強く、書院の鳴動の事夥^{おびただ}敷。大木はめき渡りて、大風の吹がごとく、大地震震て歩行する事を得ず。石塔の折れ倒るゝ音いふ斗^{はかり}なし」

これは『鸚鵡籠中記』の宝永地震（宝永四（一七〇七）、東海・東南海・南海の三連動地震）を記録した日記の冒頭である。仲間数人と高岳院^{こうがくゐん}での法事に臨んでいた筆者の朝日文左衛門重章は、「三の丸に火事出来と云に付、予独酌三盃して急き^き飯宅^{いひやう}し、両親井家内の安否を見、而直に政右と御多門へ出」と城へ駆けつける。城はあちこち損傷していたが、役職者が駆け付けていたので、下っ端の文左衛門は「御城帰り、又高岳院へ行。藤入・曲淵・源兵・勘八権内あり。源右も後に来る。濃茶・うどん・酒等給。酉半帰る」と「日常」に復帰するものの、詳細な被害状況を書き残した。内容は城内や諸士屋敷の被害など市井の状況などとともに、

近郊や諸国の被害伝聞もそのまま記録されていることで貴重な被害報告書となっている。

実は東大地震研究所の都司嘉宣教授や名大大学院の溝口常俊教授などは、以前からこうした古記録を地震防災研究に活用されてきた。幸いにしてこの日記は翻刻されている（『名古屋叢書』続編）ので、地元の私たちもその状況を読み解くことが容易である。

まずその一項に、「名古屋中にて地震にて疵^{きず}を蒙る者一人もなし。況や死する者をや。（中略）其外尾の御領分中にて、地震にて死する者未聞之。幸の又幸也」とある。にわかには信じられない記述だが、他の詳細なデータからして誤りとも思えない。そもそも、文左衛門の日記には、一介の尾張藩の下級武士では知り得ない情報があり、多くの情報提供者の協力と、情報をオーソライズできる役職者の存在が見え隠れする。ともあれ、城下の被害は少なかったようである。

先の「三の丸に火事出来」は「西鉄門内、番所の西の屋瓦を少し打損す。上より崩かゝるゆへなり。此御多門崩れて、土煙甚騰るを見て、火事と云へり」

だったようで、火が出なかったことも死傷者が少なかった一因と思われる。

津波に關しても、「智多^{ちた}辺高浪にて家潰るゝ処多し。大野村別^{べつ}而浪来り、家潰るゝ事七八十軒斗」と大被害にも関わらず、「熱田海等、甚だ潮甚高く、進退不常。新屋川等迄潮来る」程度で済んでいる。

一方、関西の被害は甚大であった。大坂では「諸士方蔵屋敷六百三十軒余潰。町方竈数一万六千余潰。落橋二十六ヶ所。廻船川内にて破損三百二十二艘。地震にて圧死三千六百三十人。高浪にて溺死一万二千百人余」とあり、紀州熊野では「長嶋地震。民家顛倒以後、高汐にて屋舎不殘漂流。男女八百余人没死、内七十余人の死尸出る」、「尾鷲町、家千余軒流れ、男女不殘漂流」、「新宮、城大に破れ崩る。町家民家大概顛倒。男女死人七百卅余人」と津波被害が記述されている。「土佐国大地震。高汐城下迄押込。然れ共城内大破無之、家中町屋民家は大浪にて打潰す」など西国で広範な被害が発生したこともわかる。関東でも伊豆や甲府をはじめ、東海道の各所の甚大な被害が記されている。つまり、けっして小規模な地震だったわけではなく、名古屋が偶然の幸運に恵まれていた事がわかる。

私たちは、この日記からどのような教訓を得ることができるのだろうか。

たとえば前兆現象。「九月八日寅半比地震のごとく動く」「九月廿五日丑刻少し地震」「九月廿六日亥比少し地震」「九月廿八日未比少し地震」など直前の頻発地震。「十月三日頃日連日暖也。別而昨夜今更甚暖也。袷にて猶暑し。予秋来いまだ在宿の外綿入を不着。去比今頃日に至り桃・李・梅・梨・庭桜等の花盛んに開く。夜雲間甚光る。電の如にして勢弱し。頃日中も夜時々東北の間光る」異常な暖かさや発光現象。さらに津波被害や火災がなければ、死傷者が減ることも分かる。是非、ご自身で一読を。

さて、この四十九日後の十一月廿三日、富士山が宝永大噴火をおこす。当然文左衛門はその詳細も克明に記録している。降灰被害、凶作、飢饉へと繋がっていく歴史上の事実を前に、私たちは「大災害は集中して繰り返す」とを忘れないで減災に努めることを教訓とすべきなのであろう。

（調査研究員 松村冬樹）

表紙は、のちの尾州茶屋家二代新四郎良延(一六九八)と推定される茶屋新六郎なる人物が朱印船貿易で長崎から交趾(ベトナム南部のホイアン)に渡航する様子を描いた長大な絵巻である。

所蔵者である源頂山情妙寺は、尾州茶屋家※初代新四郎長吉(一五七七～一六六三)が徳川家康の菩提をとむらうために慶安年間(一六四八～五二)に創建した寺院で、同寺には良延が交趾から持ち帰った観音画像も伝来している。

この絵巻が情妙寺に所蔵されていることは、高力猿猴庵の随筆「金明録」安永七年(一七七八)の記事にあるが、同寺に所蔵された経緯については、茶屋家との関係も含めその詳細は不明である。

内容は、長崎を出航し、五島列島をへて交趾に入港し、貢ぎ物を献上する姿や日本人町が描かれている。表紙は、領主の館で日本人が貢ぎ物をしている部分で、屏風や着物などを献上する袴を着けた人物の横に「茶屋新六郎」と記された紙が貼り付けられている。

この絵巻には錯簡があり、連続しない場面が貼り継がれた部分があり、当初の全巻の内容を窺い知ることは難しい状態にある。類本には、天保三年(一八三二)

の八代茶屋新四郎延充の奥書があるほぼ同寸の絵巻(個人蔵)と最近確認された縦が半分以下、全長がほぼ二倍の絵巻(九州国立博物館蔵)の二件が確認されている。前者は本絵巻とは同内容で、そこからの写しと考えられる。一方、後者は、本絵巻には描かれていない場面も多く、茶屋新六郎をはじめ文字の記述は一切なく、絵巻作品として完成形に近いものである。本絵巻をもとにして製作された絵巻もしくはその写しと考えられている。

今回、所蔵者のご好意により蓬左文庫展示室2において開催の『アジアの風』で特別公開できることとなった。期間は未定ながら、全巻の公開を予定している。

※尾州茶屋家
朱印船貿易で徳川幕府の御用を勤めた特権商人茶屋家の分家。徳川家康の命により三男が尾張徳川家に付属し、尾州茶屋家を創設した。



着物などを献上する茶屋新六郎(右下)

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なご観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【J R】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

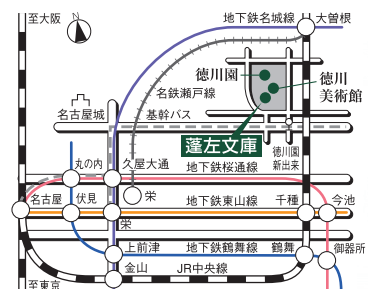
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日のときは直後の平日)

12月12日(月)～1月3日(火)特別整理・年末年始休館 但し12月27日(火)28日(水)エントランス・閲覧室開室

■展示室/有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第83号 ☆平成23年9月30日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫 ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:菱源(株)

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。